

文化

新たな知の交流

奈良女子大学の「なら学」

■奈良女の「奈良本」
4月に『続・大学的奈良ガイド』(昭和堂)という本を出版させていただいた。「奈良女子大学文学部なら学プロジェクト」が編集した本で、筆者はその一員である。

大学文学部なら学プロジェクトならびに、プロジェクトメンバーが書いてきたりーエッセイを編み直してなった。内容はおなじみの歴史的人物や寺院、祭礼から、ラクダ、ブー



寺岡伸悟・奈良女子大学教授

タン、ムスリムなど意外な話題も登場する。これまでとは、ひと味違つた。奈良本となつた。2006年に、なら学プロジェクトの成果として出した本が『大学的奈良ガイド』(昭和堂)で、冒頭紹介した本は、その続編である。

■文学部なら学プロジェクト

この本を編んだ奈良女子大

新なら 民俗通信

19 寺岡 伸悟



大学的奈良ガイド——こだわりの歩き方」(左)と「続・大学的奈良ガイド——新しい見どころ60編」

現代の課題に関わる

学文学部なら学プロジェクトは2004年、歴史を有した地域である奈良の特性を現代的視点から読み解き、その成果を外部に発信するという目的で始まった学際的プロジェクトである。

プロジェクトは「なら学」など、なら学についての授業を次々と新設し、多くの教員の協力で18年続いている。さまざまなから学生が受講

から毎年3月、奈良町のお寺や県立美術館などを借りて公開実施している。今年は、コロナ感染防止の観点から、オンラインで実施したところ、全国から参加者があつた。

なら学研究会では、近現代の奈良について調査や研究を行った在野の人々、また奈良の文化活動に深く関わった人物を回顧・再評価したり、それらの人々のつながりを明らかにすることを、主なテーマ

なら学では、こうした人となり、資料をアーカイブしたり、それらの活動を行政や事務を回顧・再評価したり、それらの人々のつながりを明らかにすることを、主なテーマ

なら学研究センターでは、こうした20年ほどの活動が学内でも認められ、近年、全学的に奈良を研究する「なら学研究センター」が新設された。それにもなつて、文学部のなら学プロジェクトは、学生教育を中心としたプロジェクトへと役割を特化した。

上記のなら学研究会も、今はなら学研究センターが運営している。第一は、ここまで書いたような、奈良・大和の二つの柱がある。

まず第一は、(てらおか・しんご)奈良の文化を支えてきた文化メディアエーテーに光を当てるこ

とである。また、センター自らも、こうした役割を担おうとしている。2021(令和3)年度だけでも、「2カ所

し、その後、各自の専攻へと進級していく。この授業をきっかけに、奈良のまちづくり活動に参加する者や、卒業研究に奈良を選ぶ学生も増えてきた。

■なら学研究会では「なら学研究会」という名称で、小規模な研究会も続いている。公開講座と異なり、専門的な議論を重視して「半公開」の形式であるが、自治体職員、学芸員、近現代奈良の郷土史に興味のある方などが参加され

なら学では、こうした人たちはエネルギーや食料の自給り、それらの活動を行政や事務を回顧・再評価したり、それらの人々のつながりを明らかにすることを、主なテーマ

なら学研究センターでは、こうした20年ほどの活動が学内でも認められ、近年、全学的に奈良を研究する「なら学研究センター」が新設された。それにもなつて、文学部のなら学プロジェクトは、学生教育を中心としたプロジェクトへと役割を特化した。

上記のなら学研究会も、今はなら学研究センターが運営している。第一は、ここまで書いたような、奈良・大和の二つの柱がある。

まず第一は、(てらおか・しんご)奈良の文化を支えてきた文化メディアエーテーに光を当てるこ

とである。また、センター自らも、こうした役割を担おうとしている。2021(令和3)年度だけでも、「2カ所

から奈良の郷土史料が持ち込

れ、知の交流がはかられた。

■澤田四郎作研究 こうした知のネットワークを行つた先人がいる。澤田四郎作(1899~1971)である。現在の香芝市五位堂は、医学を志して東京帝国大学を卒業し、大阪で開業した。その一方で四郎作は、民俗学者としても活躍し、関西の民俗学者の組織化、育成に大きな功績を残した。澤田は医院の2階をサロンとして開放し、関西はもちろん全国から

民俗研究者、人類学者らが訪れていたので、彼自身の著作は決して多いとはいえない。しかし、たとえば彼が母の言葉を記録した『ふるさと(1931年)は、大和の民俗語彙(こい)の貴重な記録である。奈良県は全国でも有数の人口減少地区を抱えている。少子高齢化、地域産業の活性化など「課題先進県」である。奈良県は全国で

にして、なら学の立場から支援していった奈良のネットワークや、文化媒介者(文化メディアエーター)たちにも光をあてたい」と考へている。

■なら学研究センターの新設 こうした20年ほどの活動が学内でも認められ、近年、全学的に奈良を研究する「なら学研究センター」が新設された。それにもなつて、文学部のなら学プロジェクトは、学生教育を中心としたプロジェクトへと役割を特化した。

私は歴史学者ではなく、古文書も読めない。民俗学を少しかじった社会学者にすぎず、なら学研究センター長となる財力も澤田に遠く及ばないが)、奈良のネットワーク、黒子として、生まれ故郷であり愛してやまない奈良のお役に、少しでもたつことを願っている。

■最後に 私は歴史学者ではなく、古文書も読めない。民俗学を少しかじった社会学者にすぎず、なら学研究センター長となる財力も澤田に遠く及ばないが)、奈良のネットワーク、黒子として、生まれ故郷であり愛してやまない奈良のお役に、少しでもたつことを願っている。

(てらおか・しんご)奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所なら学研究センター長、文学部なら学プロジェクト世話人。奈良女子大学教授(会員)